

研 究 結 果 報 告 書

所属 山西大学マルクス主義学院
役職 講師
氏名 秦 蓮星

【研究テーマ】

戦後日本における「国家神道」研究について

【研究結果】

本研究は、戦後日本における「国家神道」研究を整理することを通じて、各研究における「国家神道」概念の相違点がどこにあるか、その違いが如何に生じたのかを明らかにした。

戦前には殆ど用いられることがなかった「国家神道」の語を一般化させたのは、1945年12月15日に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）が日本政府に対して発した「神道指令」である。本指令は、「国家神道」を日本政府の法令により教派神道と区別された「非宗教的な国家的祭祀」という狭義的な定義が示される一方で、「国体論」的要素をも結び付けた広義の意味を明示したので、「国家神道」研究の混乱を齎した原因の一つとして考えられる。戦後日本においては、各学者は「神道指令」に基づき、「国家神道」の構成要素、具体的な役割及び存続期間をめぐって異なる解釈をしていた。その中に、村上重良をはじめとする学者たちは、「神道指令」にいう「広義の国家神道」をもとに、「国家神道」を神社神道と皇室神道を結合して形成された近代日本の国教であり、国民統合する上で重要な役割を果たし、指令によって解体されたと主張した。葦津珍彦をはじめとする学者たちは、「神道指令」にいう「狭義の国家神道」をもとに、「国家神道」を国家管理のもとにあった神社神道であり、国民に対して無力で、なんらのイデオロギー的効果も発揮し得なかった。そして「国家神道史」は1900年に成立して「神道指令」によって解体され、わずかに約40年の歴史を残すに過ぎないと主張した。島藺進は、「国家神道」は神社神道だけを指すのではなく、皇室祭祀や天皇崇敬のシステムとそれとが組み合わされた複合体、そして戦後も存続しているという主張である。各学者による「国家神道」概念に対する異なる解釈は、「神道指令」以外に、戦後日本の各時期における政治動向、学術水準及び各学者の問題意識などと密接に関連していると考えられる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「神社本庁と戦後日本国家神道復活運動」、秦蓮星、中国日本史学会2023年会、2023年8月12日、吉林省長春市東北師範大学
2. 「日本近現代宗教史研究動態」、秦蓮星、日本史研究動態と前線課題学術セミナー、2023年11月19日、天津市南開大学

論文(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「神社本庁と戦後日本『国家神道』復活運動」、秦蓮星、『世界宗教文化』2024年第2期。

書籍(題名・著者名・出版社・発行時期等)